在日ムスリム留学生の社会生活上の困難

Social Life Difficulties of Muslim Students in Japan

中　野　祥　子・奥　西　有　理・田　中　共　子
NAKANO, Sachiko, OKUNISHI, Yuri & TANAKA, Tomoko

1. はじめに

平成26年度外国人留学生在籍状況調査によれば、平成25年５月１日の時点で135,519人の留学生が日本に滞在している（日本学生支援機構，2014）。平成20年には「留学生30万人計画」が策定され、12年間で在日留学生の数を30万人まで増加させることが計画され、今後も数が増えていくことが予想される（文部科学省，2008）。在日留学生の出身は近隣国からが多く、最多は中国からの留学生で、全体の６割を占める。順に続く韓国、台湾を合わせると８割、インドネシアやマレーシアを含むアジアの学生を入れると９割を超える。さらには、欧州や北米、サウジアラビアやウズベキスタンなどの中近東からの学生も増加してきている。このように出身国別にみてみると、イスラム圏の学生も多数滞在していることがわかる。イスラム教を主な宗教とする国からの留学生は、平成25年５月１日現在で７千人弱在籍している（日本学生支援機構，2014）。その主な出身国の内訳は、東南アジア（インドネシア・マレーシア）が4,703人、南アジア（バングラデシュ・イラン）が1,551人、西アジア（サウジアラビア）が336人、アフリカ（エジプト）が229人、中央アジア（ウズベキスタン）が191人である。これらの留学生が全員、イスラム教信者であるムスリムであるとは限らず、他の国籍の学生がムスリムの可能性もあるかもしれないが、ムスリムの留学生が多数在籍していることが推測できる。日本の大学にとっては、これほど多いムスリムの滞在は、歴史的にも新たな事態であり、社会文化的にムスリムへの理解と対応が必要になってきている。

ムスリム学生が信仰するイスラム教は、唯一の神アッラーへの絶対的服従を意味する宗教であり、彼らには守らなければならない信仰上の決まりと、取るべき宗教上の行為があるとされる（イスラーム文化センター, 2005）。信仰上の決まりの中で重要な柱とされるのが、１）アッラーの神を唯一で絶対の神として信じること、２）その預言者であるムハンマド（マホメット）を信じること、３）聖書であるコーランに書かれている神アッラーからの啓示を信じること、４）世界には終りがあること、またその後の来世の存在を信じること、５）全ての人間の運命が神によって定められていると信じること、である（イスラーム文化センター，2009）。ムスリムの取るべき行動としては、１）入信儀礼として、決められた数の証人の前で信仰告白を行うこと、２）１日に５回、イスラム教の聖地であるメッカに向かって、神に捧げる祈りを行うこと、３）貧しい人たちのために自分の財産から寄付をするなどの施しを行うこと、４）年に一度のラマダーン月に、日が昇っている間は、一切の飲食をしな

い断食を行うこと、５）肉体的・経済的に可能な場合は生涯に一度、メッカへの巡礼を行うこと、が定められている（紅山，2010）。このように、イスラム教には守るべき信仰上の行為が明確に決まっており、ただ信仰さえあればすべて足りるとする宗教ではなく、信仰の正しい者は、その信仰を外面的な行為において表現しなければならないとされている（嶋田，1997）。信者がいかに行動するかは全てコーランに具体的に記されているという。ムスリムの宗教上の制約に基づく行動様式や価値観は、前述した礼拝習慣やラマダーン（断食）の実施の他には、飲食や服装、賭博に関する制限、男女の付き合い方にまつわる価値観などが特徴的なものとして挙げられる。まず、飲食の制限に関しては、ムスリムには飲酒が禁止されており、特に酔っぱらうことは懸念されている（赤堀，2003）。食事に関しては、豚肉及びイスラム教の儀式に則った過程で処理されていない鶏肉及び牛肉を食すことが禁止されている。その他の食材も、調理や加工に関して、一定の作法に基づいて行われなければならない。例えば、禁止されていない食べ物であっても、製造過程での禁じられた食材との隔離が認められなければならない。これらの儀式や作法が厳守された食品を「ハラールフード」と言い、ムスリムは食事の際に、ハラールフードかどうかを確認しなければならない（赤堀，2003）。また、ムスリムは身だしなみに関して特有の決まりを有しており、成人ムスリムの男性はへそから膝までを、女性の場合は顔、手首、足首から先以外の全身を、家族以外の異性の前で隠すことが望ましいとされている。そのため女性は、家の外ではスカーフを着用し、頭髪を隠している。女性の身だしなみは「清潔」であるとともに「慎み深さ」をアピールするものでなければならず、その代表的なものが頭髪を隠すスカーフとされる（桜井，2003）。男女の付き合い方については、ムスリムの成人男女は、家族同士でない限り、仲良く話すことを控えなければならず（田中，2006）、結婚前の性交渉は禁じられ、結婚を前提としない男女の付き合いは勧められていない（イスラーム文化センター，2009）。以上のように、ムスリムは飲食や服装、賭博行為に関する制約や、男女関係にまつわる価値観など、イスラム教の教えに基づいた行動様式や価値観を共有していることがわかる。

このような宗教に基づいた価値観や行動様式は日本のそれと比べて、ムスリム特有の価値観といえるであろう。礼拝習慣や食べ物に関する決まりなどの宗教的ニーズを満たすべく、日本国内では、礼拝施設として、アパートの一室を利用した小規模な礼拝所のほか、モスクが続々と建設されてきている。1990年代初頭には数えるほどしかなかったモスクは、2009年の段階で約60ヶ所に増えている（店田･岡井，2009）。また、ハラールのレストランやハラールの食材を売る店も増えつつあるという（小島，2013）。学外に限らず、大学内でも日本人学生にはない宗教的特徴をもつムスリム学生への配慮として、学食や生協においてハラールフードの提供や礼拝場の設置が検討され始めている（岸田，2011）。

一部の大学では、ムスリム学生の宗教的実践が行いやすいように環境が整えられてきているが、実際に、ムスリム留学生は、独特な価値観や行動様式を持ちながら、日本という非イスラム的な異文化環境の中でどのように暮らしているのだろうか。在日ムスリム留学生の異文化接触上の困難について

調べた我々の予備研究（中野・田中・奥西，2013）において、彼らは「対人行動上の困難」と「社会生活上の困難」の２種類の困難を感じていることが明らかになった。前者の対人行動上の困難に関する分析結果は、Nakano, Okunishi & Tanaka (2014) において報告を行った。本稿では、同じインフォーマントから得られた語りについて、社会生活上の困難に焦点を当てて分析を行った結果を報告する。具体的には、在日ムスリム留学生が日本で社会生活を送る上でどのようなことを困難に感じ、どのような違和感や戸惑いを抱くのかを明らかにする。本研究では、ムスリムが共有してもつ、イスラム教の教えの影響を大きく受けた価値観や行動様式を「ムスリム文化」と捉え、日本文化とムスリム文化の接触による社会生活上の困難を整理する。そして社会生活という面から見たとき、彼らがどのような異文化適応上の課題を抱えるのかを検討していく。

2. 研究方法

調査協力者　西日本の国立Ｘ大学とＹ大学に在学するムスリム留学生（学部生及び大学院生）21 名（男性11名、女性10名）を対象とした。出身国は、東南アジア10名、南アジア５名、西アジア３名、アフリカ２名、中央アジア１名である。在日期間は２ヵ月～10年である。調査協力者の詳細を表１に示す。調査協力者は縁故法を用いて確保した。まず、研究の趣旨とプライバシーの確保について説明した上で調査協力を依頼し、承諾を得た。

手続き　一人あたり約１時間～２時間半の半構造化面接を実施した。最初に属性について尋ね、続いて日本での生活に関して、「生活する上で不便だと思うこと、困ったと感じることは何か」、「やりにくさや戸惑いを感じることはあるか、あるとすればそれはどのようなことか」など、社会生活上の困難について尋ねた。面接は英語と日本語のいずれかの言語で行われ、許可を得て語りを記録し、逐語録を分析に用いた。英語でのインタビューの場合は、第一筆者とアルバイト学生が英語で文字起こしと日本語への翻訳を行った後、３名のバイリンガル人材が、確認と修正を行った。なお、研究の趣旨とプライバシーの保護をインフォーマントに説明し、研究協力への了解を得たうえで、面接は行われた。

分析　語りの逐語録から、環境移行に伴う社会生活上の困難が語られた部分を抜き出し、KJ法Ａ型（川喜田，1967）を用いて分析した。具体的には、まず、面接で得られたデータの逐語録の中から、日本で生活していく上での異文化性に基づく困難や戸惑いの体験が語られた部分を抜き出した。その際、「日本ではまた震災が起こるのではないかと不安で困る」や「ゴミの分別がやっかいだ」というような、日本とムスリムの文化の違いに基づかない困難については分析の対象外とした。次に、抜き出した語りを意味のまとまりに留意しながらエピソードごとに切り分け、カード化した。類似性のあるエピソードが書かれているカードをまとめ、そのまとまりの表札となる見出しを付けて小グループとして編成した。更に小グループ同士を見比べ、関連性のあるものをまとめてグループ編成し、グループが編成されるたびに見出しを付けていった（表２）。

表１　調査協力者一覧

調査協力者	年　齢（歳）	性　別	出身国	専　攻	日本語力	滞日歴
A	30	男性	イラン	理系	初級	４年５ヶ月
B	22	男性	マレーシア	理系	上級	４年３ヶ月
C	32	男性	スーダン	理系	初級	５ヶ月
D	27	男性	シリア	理系	初級	２年３ヶ月
E	27	男性	イラン	理系	初級	１年２ヶ月
F	27	男性	イラン	理系	上級	10年７ヶ月
G	23	女性	イラン	文系	初級	１年５ヶ月
H	20	女性	マレーシア	理系	上級	１年３ヶ月
I	30	女性	イラン	理系	初級	４年
J	38	男性	フィリピン	理系	初級	４年４ヶ月
K	20	男性	サウジアラビア	理系	中級	３年２ヶ月
L	20	女性	スーダン	文系	上級	18年
M	22	男性	アフガニスタン	文系	上級	11年
N	20	女性	マレーシア	理系	中級	２年２ヶ月
O	31	男性	マレーシア	理系	上級	７年６ヶ月
P	24	女性	インドネシア	理系	初級	６ヶ月
Q	22	女性	インドネシア	理系	中級	２ヶ月
R	31	女性	インドネシア	文系	初級	７ヶ月
S	21	女性	インドネシア	文系	上級	８ヶ月
T	21	男性	サウジアラビア	理系	上級	１年２ヶ月
U	19	女性	アレーシア	文系	中級	３ヶ月

3. 結果

在日ムスリム留学生の社会生活上の困難について分析した結果を下記の表２に示し、それの根拠となった語りの詳細を抜粋して項目ごとに、本文中に提示していく。なお、表２のカテゴリー名の横の括弧内の数字は、それを構成する、意味のまとまりごとに切り分けて作成したカードの枚数を示す。小項目の括弧内の数字は、その項目について困難を示したインフォーマントの数と一致する。大項目の括弧内の数字は小項目の合計を示している。なお、各項目における語りの提示には、間投詞や言い淀みなどは適宜省き、プライバシー保護のため、国名や人名などの固有名詞は適宜記号化した。また、

意味が通りやすいように必要に応じて筆者が括弧内に言葉を補足した。加えて、彼らの困難について分析するうえで解釈の根拠となった語りの箇所に下線を引いた。

分析の結果、社会生活上の困難の事例として得られたカードの総数は36枚、一人当たりの平均は1.71枚(SD=1.28)であった。彼らの困難として、大きく分けて４つの大項目が抽出された。具体的には、「材料の入手が難しいこと」、「食べられるメニューが少ないこと」、「成分の読み取りが難しいこと」の３つの小項目から成る、１）『飲食の制限による困難』、「礼拝時間を厳守すること」及び、「礼拝場所を確保すること」の２つの小項目から成る、２）『礼拝習慣に関する困難』、「マスメディアからくる悪印象による過ごしにくさ」、「性的な場面及び肌の露出を目にすること」の２つの小項目から成る、３）『マスメディアの影響による困難』及び、「男女の区別がない施設を利用すること」を小項目に持つ、４）『行動上の制約による困難』である。

表２　在日ムスリム学生の社会生活上の困難

大項目		小項目	
飲食の制限による困難	(16)	・材料の入手が難しいこと	（7）
		・食べられるメニューが少ないこと	（5）
		・成分の読み取りが難しいこと	（4）
礼拝習慣に関する困難	（9）	・礼拝時間を厳守すること	（5）
		・礼拝場所を確保すること	（4）
マスメディアの影響による困難	（8）	・マスメディアからくる悪印象による過ごしにくさ	（6）
		・性的な場面及び肌の露出を目にすること	（2）
行動上の制約による困難	（3）	・男女の区別がない施設を利用すること	（3）

次に、大項目ごとに困難の詳細についてみていく。『飲食の制限による困難』は、信仰上食べられる物に制限があるムスリムと非イスラム圏である日本社会との間に生じる困難であった。母国ではハラールの食材を売る店やハラールの食材を使った料理を提供するレストランが多数あったが、非イスラム圏の日本では少ないため、入手に不便さを感じていた。彼らにとって宗教上許容されない食材が混在する日本社会において、食材に関する適切な情報を得て、食べられないものを見分け、確実に避けていかなければならないことに困難を覚えていた。例えば、レストランで肉類を避けたメニューを選んでも、日本料理にはしばしば、みりんなどの調理酒が使われていることが多く、料理に使用されるアルコールも摂取が禁じられている者には、日本での食べられるメニューの少なさへの不満は特に深刻なものであった。食べられるメニューの少なさゆえに、外食を避け、食べられるものを自分で作ろうとする者も多数いた。しかしながら、そこにも一種の困難が生じることがわかった。日本で自炊するにあたっての食材入手の際に成分をチェックすることは、ムスリム学生にとっては欠かせないこ

とであるが、漢字やカタカナ、ひらがなが複雑に混じる表示は、日本語力の乏しい者にとっては読み取りが難しい。さらに、ムスリムへの販売を想定していない日本業者による表示内容は、彼らにとっては不十分であり、求めている情報が必ずしも掲載されていないことも困難の一つであるという。最終的には、使用している乳化剤は動物性か植物性か、同じ製造ラインで他に何を作っているのかなどを、製造元の工場や会社に問い合わせて確認しなければならなくなるという。インフォーマントの語りの事例を以下に示す。

『飲食の制限による困難』に関する語りの事例
材料の入手が難しいこと
「買い物のとき、イスラム教では食べられないものがありますから、食べられるものを探すのは大変です。食べてはダメなものを見つけるのが大変です。みりんだったら、それを避けるのは難しいです。お店の人に聞いても、お店の人はみりんが入ってるかどうかわかりにくい。目に見えない小さな物ですから。」（Qさん）
食べられるメニューが少ないこと
「やっぱり食べ物の問題、ちょっと嫌になってしまいました。食べれるものが少ないし。（中略）日本料理って、だいたいお酒とか動物から作った乳化剤がいっぱい入っているのはちょっと、問題になるんです。なんか飲み会に行っても、多分友達と、交流できるんですけど、やっぱり食べるときは、食べものがなかなか無いです。」（Hさん）
成分の読み取りが難しいこと
「もし私が何か食べようとしたらその前に成分を確認しなければなりません。（中略）残念なのは成分はほとんど漢字で書かれていることです。難しいです。」（Cさん）

次に、『礼拝習慣に関する困難』について、１日５回の礼拝のうち昼間に行う礼拝において、大学に居る場合や外出先の近くにモスクがない場合に、お祈りをする場所を確保しにくいことが困難の一つとして挙げられた。１回の礼拝は５分から10分ほどで、自らが祈るスペースがあればよいというものの、礼拝前は手足を洗う必要があるため、洗い場が遠い場所では困るという。また、お祈りをしている姿を日本人に見られないようにしようと思えば、人目につかない所が好ましいが、それらの条件を満たす場所を確保するのはなかなか難しいという。さらに、礼拝の時間を厳守することにやりにくさを感じる者もいた。これには２つの問題があり、一つ目は、礼拝をするべき時間帯に講義がある場合に礼拝時刻が厳守できないという問題と、もう一つは、礼拝の時刻が明確にわかりにくいという問題であった。礼拝の時刻は日の出と日の入りの時刻によって決められる。そのため、緯度経度が母国とは異なる日本では、母国にいたときと同じようにとはいかないことや、また、日本の四季による月々の細かい時間の変化に対応することに苦労したと述べる者もいた。母国では、礼拝が始まる時間になると、モスクを中心にスピーカーによって、アザーンと呼ばれる、お祈りを開始することを知らせる

呼びかけが流されるという。一方、日本では、各地でそれが行われないために自分たちで礼拝開始の時刻を調べなければならないことに不便さを感じていた。語りの詳細は以下である。

『礼拝習慣に関する困難』に関する語りの事例
礼拝場所を確保すること
「僕たちはちゃんとした（礼拝の）時間が決まってて、時間がきたら礼拝するんですけど、モスクがない場所だったら、ちょっと辛いですね。出来れば、隠れたところで礼拝するんですけど、警備員の人から叱られたこともあります。「何やってるんだ！」って。普通のことなのに、こうやって注意されると困るなという気持ちと日本だから仕方ないなという感じですね。」（Oさん）
礼拝時間を厳守すること
「礼拝の時間が厳しいじゃないですか、で、日本に来てから、それがちゃんとできるか、ちょっと困るなと思いました。私、時々遅れます。」（Sさん）

『マスメディアの影響による困難』に関しては、メディアの影響による日本人からの評価を気にするという困難と、イスラム教の教えでは許容されない、見たくないものを日本のテレビを通して目にしてしまうという２種類の困難があった。一般に日本人はあまりムスリムの生活や宗教的行為について馴染みがなく、メディアを通してこれらの情報を知ることになる。その情報を日本人側が短絡的に受け取り、例えば、良くないニュースを見て、全てのムスリムがそうであるというような偏見をもったり、ムスリムとは断食や禁酒をする厳しい宗教であると簡単に理解してしまったりすることで、真の理解が得られないことへの不満や、周りの目が気になってしまうことに過ごしにくさを感じていた。また、日本文化とイスラム文化では露出に関する価値観も異なるため、ふいにつけたテレビ番組で、彼らの価値観においては許容しにくい異性の露出や性的な描写を目にしてしまうことに困惑する者もいた。語りの事例を以下に示す。

『マスメディアの影響による困難』に関する語りの事例
マスメディアからくる悪印象による過ごしにくさ
「ムスリムとして不便に思う事は、日本ではマスメディアの影響でムスリムに悪いイメージがあります。（中略）みんなはムスリムと会ったことがなくてもそのニュースを見てムスリムが悪いと思います。時々、その人々の目が不便だなと思います。ムスリムに対する目。何人かの人はムスリムに対して悪いことを思っているから。多分マスメディアの影響でちょっと怖いって思っていると思う。だから最初は理解してもらうまでは大変だと思う。」（Rさん）
性的な場面及び肌の露出を目にすること
「困るというか、大変やね。テレビ見てて、いやらしいシーンが出てきたらすぐにチャンネル変えたり、テレビ消したりとか、そういうの。特に家族の前なら消します。絶対！（映画には）行かない。まず、ムスリムの人は日本であんまり映画見ない。特にアメリカの映画は絶対見ない。全部がアウトだから。僕はいつもがっつりお笑い見てるけど、お笑いでも、パンツ一丁で出てくるのはダメ。ダメダメダメ。そっち系は絶対ダメ！相撲も女性だったら絶対見たらいけない。イスラムの人は。いくら相撲が文化や！って言われても、女の人に見せたら“何してんねん！”ってなるよ。」（Mさん）

最後に、『行動上の制約による困難』は、異性との付き合い方をめぐる日本文化とムスリム文化との考え方の差に生じる困難であった。例えば、プールやビーチなど、母国では男女を分けて使用していた施設でも、日本では男女の区別なく使用しなければならないことに抵抗を感じていた。なお、本研究における調査協力者が日本で在籍しているのは男女共学の大学である。彼らは、イスラムの教えを基準としない日本では、男女の区別があまりないことを来日前から自覚していたというものの、実際の生活では抵抗感を覚えることや困難に感じる場面もあることが明らかになった。語りの事例を下記に示す。

『行動上の制約による困難』に関する語りの事例
男女の区別がない施設を利用すること
「お祈りをする前にちゃんと準備した後、もし男性を触っちゃったら、もう一回準備をし直さなければならない。食堂に行った時、男性がすごく多い。男の人も一緒だから。だから、私はいつもこうやって腕を組んで歩きます。ぶつからないように。理解してほしいです。」（Qさん）

以上のように、彼らは日本社会で生活する中で、自らの宗教的実践を貫こうとするときに困難を抱えていた。彼らが困難を経験しながらも信仰に基づいた行動規範を保持しようとする理由についての語りも見られた。例えば、Mさんは次のように語っていた。“*神（の教え）からぶれない限り不安はない。（中略）私が死ぬ日も（神によって）決まっているし。全部決まっている。事前に。でも、そこまで行くのに自分をどれだけ磨いていけるかなってこと。神とどれだけ関係を作っていけるかなってこと（が大事）（Mさん）*”。教えを守ることは神との関係を作ることだと捉えて実践していること

がうかがえる。

Ｋさんは以下のように述べていた。“*一回でもダメなことをやったことがあるなら、僕はすごく気持ちが悪くなる。神との決まりは絶対に守る。僕は我慢して貫き通す。つらいよ。でも我慢するのは、きっと結婚したら相手が良い人になると思うし、そのような（教えに背く）ことをしたら、誰か悪い人が僕の家族に近づいて、悪いことをしたり、僕の家族の心を壊すかもしれないから。だから、僕はやりません。僕もお姉さんがいるから、お姉さんがそのような目に遭ったら困るから（Kさん）*”、“*初めて（モスクに）行ったときは嫌だったけど、そこにコーランがあって読んでみたら、「あれ？これ、深いことがいっぱい書いてある」って思った。後で自分で調べていくとコーランは本当に、言葉だけじゃなくて、生き方。ライフスタイルみたいな感じ。やってみたらいいんじゃないかと思った（Kさん）*”。自分や家族にふりかかる災難を回避するために信仰を守ったり、自らがイスラムの教義を深く理解した上で、教義に従いたいという思いから宗教的実践を保持していることがうかがえる。

Ｇさんは以下のように述べている。“*何かしたいと思っているのですが、政府がそうさせない。（もし、信仰上の決まりを破れば）政府の護送車に乗せられて刑務所に連れて行かれます。母国ではみんながイスラムで宗教を選ぶことができません。（中略）人々にイスラム教を強要するのです。そのため例えばお祈りをすることとか断食とかスカーフを付けることとか習慣の一部になって、慣れてしまうんです。それでそれをしないことが難しくなる（Gさん）*”。以上からは母国での社会的な圧力や、それによって習慣化された行動を曲げることができないという悩みが見られる。

4.考察

本研究では、日本の大学で学ぶムスリム学生を対象に、日本における社会生活上の困難を探索した。今回の結果は『飲食の制限による困難』、『礼拝習慣に関する困難』、『マスメディアの影響による困難』及び『行動上の制約による困難』の４つの大項目とそれに付随する８つの小項目を明らかにした。在日ムスリム学生にとって、非イスラム圏である日本での生活は、宗教的な実践が日常で行われることを前提とされる母国の環境とは異なり、宗教的実践を行いにくい。また、イスラムの教えに基づいた価値観をもたないホストである日本人が作り上げる環境ゆえに、信仰を貫くうえで必要な情報を見つけにくかったり、信仰上、許容しにくいものが予期せず目に入ってきたり、周囲から理解を得ることが難しかったりと、彼らに不便さや困難をもたらしていた。

今回明らかになった困難のいくつかは、移民や児童、就労者を含む在日ムスリムを対象にした先行研究の中で共通する知見がみられる。例えば、『飲食の制限による困難』の「材料の入手が難しいこと」については、６名のムスリム留学生への聞き取り調査を通して、在日ムスリム留学生のコミュニティの実態及び留学生活における葛藤や困難を明らかにした、市嶋（2013）でも報告されている。市嶋（2013）は、この他にムスリム留学生が、日本人によるイスラム教への無理解を問題に感じていることを明らかにしている。さらに、食材入手の困難や日本人による無理解の問題意識は、滞日歴が長くなるほど

強くなる傾向があると述べている。本研究では、滞日歴が長い者も、短い者も困難を示しており、両者の差は検討していないが、困難に感じる度合いの差や、その対処法の内容など、滞日歴の長さによる差があるのかは、今後検討の余地があろう。「食べられるメニューが少ないこと」の困難は、給食を利用するムスリム児童においても強調される困難である。在日インドネシア人ムスリム児童を対象に、彼らの宗教的価値形成と教育の現状について調べた服部（2007）は、ムスリムの児童が日本で円滑に学校生活を過ごすうえでは、いくつかの障壁があることを報告した。その中でも給食、断食月への配慮、宗教的要素を含む学校行事への参加、の３点が特に切実な問題であると述べている。加えて、服部（2007）は、困難への対処についても触れていた。例えば、保護者が給食の献立をチェックし、食べられないものがある場合はお弁当を作って対処していたことを報告しているが、その際に、理解のない教員に対しては、「アレルギー」として理解を求めていたという。日本の小学校におけるムスリム児童の給食を巡る問題は、成分チェックにまつわる困難以上に周囲への理解を得ることが課題となるのかもしれない。

本研究のムスリム留学生の間で散見された、「成分の読み取りの困難」に関する知見もある。ムスリム学生たちからの相談内容と大学の対応について報告している、田中・ストラーム（2013）によれば、ムスリム学生たちは礼拝場所の確保や食事についての困難を抱えているという。彼らは食堂で食材についてスタッフに尋ねながら、注文するメニューを選ばなければならないことに抵抗を感じ、学内食堂のメニューに材料名を明記するよう求めたことが報告されているが、彼らの困難の内容は、本研究のインフォーマントが示した困難の内容と少し異なっていた。田中ら（2013）のインフォーマントとなったムスリム学生達が困っていたのは、ハラール食の有無や成分を確認することの煩わしさではなく、食堂で給仕しているスタッフに材料を尋ねるため、待っている人たちの列を止めてしまい、迷惑をかけていることであった。ハラール食の情報明示の希望は、周りの人々の迷惑にならないようにしたいという理由から来ていた。在日ムスリム留学生にとって、日本での食料の購入には様々な種類の困難が伴うことが示唆された。

さらに、田中ら（2013）は「礼拝場所を確保する困難」について、彼らの困難は、礼拝する場所が見つかれば解決する、という単純な問題ではなかったことを新たな気づきとして報告している。ムスリム学生たちは礼拝場所がないことへの対処として、毎日の礼拝には空き教室などを適宜利用しているが、教室に後から入ってきた学生が礼拝の様子を見て去っていくことに対して、申し訳なさや、許可をもらっていない空き部屋を勝手に使ってよいのかという不安を抱えていたという。ムスリム学生にとって、宗教的実践を滞りなく行うことは最優先されるニーズであるが、宗教的ニーズが満たされれば十分ではなく、周りの日本人へ配慮をしながら、関係性を壊さない程度に宗教的実践を行っていくことが、彼らにとっての困難解決になるのかもしれない。彼らにとっての社会生活上の困難は、対応次第で、時にはホストとの対人関係にも影響を及ぼす場合もあるという可能性が示唆された。実際に、在日ムスリムの対人行動上の困難を調べた我々の先の研究では、飲食に関する制約があるために

日本人と食事を共有できないことが、日本人が好意でくれた食べ物や勧めてくれた料理が宗教上食べられない場合などに、申し訳なさや断ることへの抵抗感を感じ、日本人との食事に対して億劫になってしまうといった、対人行動上の困難へと発展している例が散見された（Nakano et al., 2014）。

『マスメディアの影響による困難』に関しては､「マスメディアからくる悪印象による過ごしにくさ」について、市嶋（2013）において本研究と同様の知見がみられた。日本人がイスラム教について、禁酒や豚肉を食さない厳格な宗教であるという単純なイメージを抱くに留まっているため、ムスリム学生が過ごしにくさを感じ、新しいイメージを作ろうと試みるが、その機会になかなか巡り会えないことに困惑していることを報告している。ムスリムについての理解を深めてもらおうとするものの、その試みは容易なものではないらしいことが彼らの困難をさらに深めている可能性もうかがえる。本研究のインフォーマントにおいては、*“多分マスメディアの影響でちょっと怖いって思っていると思う。（中略）直接（日本人にどう思っているかを）聞かないけど。（Rさん）”*というように、日本人に直接聞いたわけではないが、おそらくマスメディアの影響でムスリムに対して悪いイメージを持っているであろうと予測することで過ごしづらさを感じている者や、*“前、聞いたんですよ。「ムスリムのことどう思いますか？」って。そしたら「テロリスト」って（言われた）。ちょっとショックです。（Rさん）”*のように、実際に日本人と交流する中で、メディアの報道を鵜呑みにした日本人からの一言を受けて困惑した者がいた。この種の困難の深刻度はホストとの関わり方によって異なる可能性がある。「性的な場面及び肌の露出を目にすること」に関する困難は本研究において新たに明らかになった困難であった。

『行動上の制約による困難』の「男女の区別がない施設を利用すること」については、子育てをする親にとっての困難であることが先行研究において示されている。桜井（2003）は日本各地のモスクを取材し、ムスリムがどのような生活を送っているかを調べ、保育園に娘を預けているパキスタン男性が、男の子と女の子を隔てなく同じプールに入れたりすることに強い抵抗を感じていると報告している。抵抗を感じる理由はイスラム世界では男女は異なる空間に存在すべきであるという規範を重んじるからであると言及されていたが、本研究のインフォーマントの場合は、規範を重んじるあまり、強く抵抗感を抱くというよりは、自分たちにとって馴染みのない日本文化的な感覚に触れて、困惑しているようであった。ムスリムとして立派に子どもを育てようと努める親の場合と、留学生とでは困難に感じる度合いが異なるのかもしれない。なお、今回のインフォーマントが在籍する大学は、X大学にはお祈りの場所が１ヶ所設けられており、Y大学には学内に指定された礼拝場所はないものの、大学の近くにモスクがある。食事に関しても、食堂にハラルフードのメニューがあったり、身近にハラールの食材を売る人がいたりと、比較的、宗教的なニーズを満たしやすい環境であったといえる。それでも、彼らは日本で生活する上で、ムスリムの文化的価値観に基づく行動様式と日本文化のそれとの差に基づく困難を経験していることが明らかになった。

このような困難を抱えるムスリム学生の日本への適応は難しいのであろうか。異文化適応には様々

な側面があるが、社会文化的適応の側面から見れば、留学先の環境に合わせて、問題を克服しながら社会生活をこなしていくことが重要な課題となるであろう。Furnham & Bochner（1982）は困難課題への克服を助けるソーシャルスキルの獲得を視野に入れたうえで、在英留学生がどのような社会的場面で困難を経験しているかを調査し、困難領域を明らかにした。その困難項目の中には、対人面の困難の他に、「医者に行くこと」や「トイレ施設を使うこと」、「レストランへ行くこと」などの項目も含まれており、移行先で不自由なく社会生活をこなしていくことも課題の一つとして捉えられていた。さらにFurnham et al.（1982）で使用された尺度から示唆を得て作られた社会文化的適応尺度（Ward & Kennedy, 1992）の中には、「友達を作ること」、「異性と関わること」などの対人関係に関する項目とともに、「いつもどおりお祈りすること」や「地元の食べ物を使うこと」、「食の楽しみを見つけること」などの環境面の項目も含まれている。守るべき価値観や行動様式がコーランに明確に定められているムスリム学生にとっては、信仰を無視してホストとのやり方に合わせていくというホスト社会への完全な社会文化的な同化は難しい。

彼らが来日以降も日本文化に合流することなく、自らの信仰に基づいた行動を貫こうとするには様々な背景があるように思われる。吉田（2003）によれば、イスラム教を始めとする一神教は一様に来世の重要性を説いており、現世で神の命令、すなわち信仰上の決まりに忠実であった者には奨励として天国が与えられ、背いた者は刑罰として地獄に落とされ永遠の責め苦を味わうとされている。そして、それゆえに、現世において教義に忠実に従って神との関係を築くことは彼らにとって重要であり、将来への不安を取り除くことにもなるという。

本研究においても、インフォーマントの語りの中にこのようにする解釈と重なる語りが見られた。例えば、Mさんの“*神（の教え）からぶれない限り不安はない。（中略）私が死ぬ日も（神によって）決まっているし。全部決まっている。事前に。でも、そこまで行くのに自分をどれだけ磨いていけるかなってこと。神とどれだけ関係を作っていけるかなってこと（が大事）（Mさん）*”という語りがそうである。その他にも、Kさんのように自分や家族にふりかかる災難を回避するために信仰を守ったり、自らがイスラムの教義を深く理解した上で教義に従いたいという思いから宗教的実践を保持していたり、Gさんのように母国での社会的な圧力や、それによって習慣化された行動を曲げることが難しいからなど、日本において信仰に基づいた行動を保持し続ける理由は様々であった。

このように、それぞれの事情から、信仰に基づく価値観や行動を曲げたくない、あるいは曲げられないという彼らの日本文化への適応には、ホスト側がムスリムに理解を示したり、配慮したりするなどの歩み寄りが必要になってくるであろう。実際に、在日ムスリムとの交流においてホストである日本人側がムスリムについて理解することの重要性に着目して、理解を促すための試みを行っている例もある。名古屋大学留学センター（2012）は、日本人学生及び職員にむけてムスリムの学生生活における信仰上の基本的な事項を紹介する資料を作成している。そこでは、飲食に関する制約や礼拝習慣、断食の実施、男女の付き合い方についてなどのイスラム教の宗教的な特徴をまとめた上で、ムスリム

留学生を受け入れる際に日本人側が配慮すべきことが提示されている。単に情報を羅列するのではなく、非ムスリムの日本人とムスリム学生が共に学生生活を送る上で、日本人側が戸惑ったり、両者の間で齟齬が生じたりする可能性のある出来事を想定して、日本人側への助言がまとめられている。

在日ムスリムは非ムスリム的な環境である日本社会で生活する上で困難を抱えているが、これまで述べてきたように、ホストによる理解や配慮が必要になってくることや信仰に基づいた価値観や行動を曲げにくい様々な理由から、日本文化に合流することによって困難を克服していくのは難しい。しかしながら、本研究で明らかになった困難を、彼らなりのやり方で対処していくことで和らげていくことは可能であろう。例えば、食材入手の際の成分読み取りに必要な日本語を事前に学習しておいたり、ハラールフードを売っている店を調べて把握したり、あるいはオンラインで購入できるサイトを見つけておけば、食材入手の困難は和らげられるかもしれない。また、それらの情報をムスリム同士のネットワークの中で共有することも有効であろう。また、食材の成分について尋ねたり、レストランなどで宗教上食べられない食材を抜いたメニューにしてもらったりするための交渉のスキル、礼拝を行う場所の許可をとる際のお願いの方法や宗教的な教義についてわかりやすく説明を行うスキルを持ち合わせておけば、イスラム教についての知識が希薄な日本人からの理解や配慮が得られ、困難事例にスムーズに対処できよう。また、マスメディアによってムスリムに対するステレオタイプをもった日本人の誤解を解くことにも繋がるであろう。さらに、宗教への関心が低い日本人や非イスラム的な環境である日本社会について予め知っておくことで、困難になりそうな事柄自体を回避したり、未然に対処して防ぐことができたり、あるいはある程度理解して身構えることで、慣れない施設を使用するときの抵抗感や食事の際の煩わしさを減らしていけるかもしれない。困難が和らぎ、日常の社会生活が円滑に進むことで、心理的な適応に良い影響をあたえる可能性もあるだろう。本研究で明らかになった在日ムスリム留学生の社会生活上の困難項目は、問題を解決に導くためのソーシャルスキルが必要とされる領域の特定への示唆を与えた。また、このような社会生活上の困難は留学初期に見られやすいとの報告があるが（Ward et al.,1992）、本研究の在日ムスリム留学生の場合は滞在期間の違いによる差は確認できなかった。今回の調査においては、ムスリム留学生が日本で社会生活をしていく上で、滞日歴の長さによらず、なんらかの社会生活上の困難を伴っていたことが明らかになった。滞日が進むにつれ、困難への対処方略が見出されることで、困難を感じる度合いが留学初期と比べて減っていく可能性も考えられるため、滞在期間の長短による困難さの程度の違いについては今後の検討課題の一つとしたい。

本研究の結果は、限られた特定のインフォーマントから得た知見である。大都市の方が礼拝場所やハラールレストランの数も比較的充実していることから、大都市に在籍するムスリム学生と他の地域のムスリム学生では困難の種類や度合いが異なる可能性がある。日本の国内における環境の差のみならず、インフォーマントの出身国などの背景によっても、環境や戒律を守る度合いやその基準などが異なるため、日本で感じる困難の種類や度合いが変わってくるであろう。今回の調査では、多様な出

身国のムスリムを一括りにして分析しており、日本文化と各ムスリムの留学生の出身国文化との文化的距離には注目しておらず、ムスリム文化と母国文化が分離されていない。またムスリムの場合は性別ごとに教義が異なる部分があるので、今後は広範囲にデータを集め、性別や出身地域別の分析、今回明らかになった困難項目の一般性の検討も必要になろう。また、これらの困難に対する対処となるスキルの内容を、具体的に詳しく解明することが今後の発展的な課題である。次の段階として、在日ムスリムにより実際に行われていて、効果を持っている対処方略についての調査と分析を進めていきたい。

謝辞

本研究のインタビューに協力して下さった留学生の皆さんに感謝致します。

引用文献

赤堀雅幸（2003）．禁じられた食べ物　後藤晃・山内昌之（編）イスラームとは何か　新書館pp. 198-199.

Furnham, A., & Bochner, S.（1982）. Social Difficulty In a Foreign Culture: An Empirical Analysis of Culture Shock. In Bochner, S.（Ed.）, Cultures In Contact: Studies In Cross-cultural Interaction. Oxford: Pergamon Press.

服部美奈（2007）．在日インドネシア人ムスリム児童の宗教的価値形成―名古屋市における自助教育活動の事例から―　異文化コミュニケーション研究, **19**, 1-28.

市嶋典子（2013）．在日ムスリム留学生の宗教的葛藤と留学生支援　言語文化教育研究会2013年度研究集会大会, 発表予稿集, 109-114.

イスラーム文化センター（2005）．相互理解を目指して―イスラーム―世界宗教の教えとその文明　イスラーム文化センター

イスラーム文化センター（2009）．イスラームという生き方―その50の魅力―　イスラーム文化センター

川喜田二郎（1967）．発想法―創造性開発のために 中公新書

岸田由美（2011）．ムスリム留学生の宗教的ニーズへの対応：現状と課題　留学生交流・指導研究, 13, 35-43.

小島宏（2013）．日本・韓国・台湾のムスリム移動者におけるハラール消費行動の関連要因　早稲田社会科学総合研究, **14**, 1-22.

紅山雪夫（2010）．イスラムものしり事典　新潮社

店田廣文・岡井弘文（2009）．日本のモスク調査２―イスラーム礼拝施設の調査記録―　早稲田大学人間科学学術員アジア社会論研究室, 1-49.

文部科学省中央教育審議会（2008）．留学生30万人計画の骨子とりまとめの考え方に基づく具体的方策の検討　文部科学省　2008年７月８日<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo４/houkoku/1249702.htm>　（2013年７月20日）

名古屋大学留学生センター（2012）．ムスリムの学生生活ーともに学ぶ教職員と学生のために　名古屋大学留学生教育センター，１-23.

Nakano,S., Okunishi. Y., & Tanaka., T.（2014）. Interpersonal Behavioral Difficulties of Muslim Students in Japan During Intercultural Contact Situations. In Rogelia,P.（Ed.）, *Social Harmony: Promoting Indigenous, Social and Cultural Psychology*. Yogyakarta（印刷中）

中野祥子・田中共子・奥西有理（2013）．異文化接触場面における困難とその対処からみた在日ムスリム学生の異文化適応スタイル 多文化関係学会第12年次大会抄録集, 91-94.

日本学生支援機構（2014）．平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果<http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data13.html>　（2012年７月15日）

桜井啓子（2003）．身だしなみ　後藤晃・山内昌之（編）イスラームとは何か　新書館　pp. 200-201.

嶋田襄平（1997）．イスラム教史　山川出版社

田中京子（2006）．ムスリム学生たちと築くキャンパスの多文化環境について　名古屋大学留学生センター紀要, 4, １-23.

田中京子・ストラーム ステファン（2013）．大学による多文化環境整備—ムスリム学生との協動の視点から—ウェブマガジン 留学交流, 28, １-9.

Ward, C., & Kennedy, A.,（1999）. The measurement of sociocultural adaptation, *International Journal of Intercultural Relations,* 23（４）, 659–677.

吉田京子（2003）．天国と地獄　後藤晃・山内昌之（編）イスラームとは何か　新書館　pp. 18-19.